

2019年2月4日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員（主査）理工学部専任教授

山 本 俊 哉 印

（副査）理工学部専任准教授

鞍 田 崇 印

（副査）研究・知財戦略機構特任教授

田 村 誠 邦 印

1 論文提出者 森脇 環帆

2 論文題名 防災まちづくりアートに関する実践的研究

（英文題） Practical Study on Art Project about Community Development for Disaster Prevention

3 論文の構成

本論文は、次の6章から構成されている。

第1章 序論

第2章 防災まちづくりアートの概念と手法の分析

第3章 防災まちづくりアート・プログラムの開発とその評価

第4章 防災まちづくりアートによるリスクコミュニケーション

第5章 防災まちづくりアートのアート性と持続的展開に関する考察

第6章 結論と課題

4 論文の概要

本論文は、東日本大震災の経験と教訓を踏まえ、避難に関する自助・共助を促進する観点から、「防災まちづくりアート」を提唱し、津波の被災地と未災地を対象にしたプログラムを開発するとともに、その評価と改善、並びに類似例の持続的展開に関する考察を通して、防災まちづくりアートの概念と手法の普遍性、そのコミュニティアートの芸術性、持続的展開の可能性について論じている。

本論文では、まず防災とまちづくりとアートに関する先行研究と先行事例を分析し、防災まちづくりアートとは、防災まちづくりの持続・促進するために、災害の記憶の継承、災害のイメージの喚起を図り、その作品プロセスを重視するコミュニティアートであると概念規定した上で、それを実践するために、防災課題の視覚化、感覚的変動、新たな「祭り」、ワークショップ、リスクコミュニケーション、プロジェクト性をキーワードとする6つの手法を提示している。それを自ら具体化した防災まちづくりアート・プログラムは、作成した津波からの避難地形時間地図（逃げ地図）の解説と地元関係者のヒアリングからアートの表現対象の要素を抽出する方法をとり、被災地では災害恐怖の軽減を図り、未災地では災害リスクの感覚的理解を促す内容にしたこと、その参加者アンケートの分析を通して、このプログラムが災害の心構えと防災の関心を高め、地域をよく知る上で意義があ

るという評価を得たが、このプログラムだけではリスクコミュニケーションの促進効果が期待できないことを明らかにしている。そこで、高齢者の避難支援に関するクロスロードゲームの要素を新たに組み込んだプログラムを開発し、避難に関する自助と共助をめぐる葛藤に揺さぶりをかけたアートの力によってリスクコミュニケーションを促したことを明らかにし、先に規定した概念と手法を検証している。すなわち、アートが持つ感覚的変動により、その楽しさが参加の意欲や地域の関心を高め、リスクコミュニケーションの好機を生み出し、既存の防災まちづくりに刺激を与えて持続的展開を促す可能性を明らかにしている。

他方、防災まちづくりアートを持続的に展開してきた先進地域の事例研究を通して、防災まちづくりアートの持続性と芸術性の関係を問い直し、防災まちづくりアートの持続性を重視すると、その芸術性を希釈化せざるを得ないこと、防災まちづくりアートの芸術性を重視すると、一つのプログラムでは限界があり、複数のアーティストがその地域の防災まちづくりに関わる必要性を課題として提示している。

本論文を構成する全6章の概要は以下のとおりである。

第1章「序論」では、まず本研究の背景、目的と方法を明示した上で、先行研究を踏まえて本研究における防災とまちづくりとアートの用語をそれぞれ定義し、防災まちづくりとアートが重なる領域を防災まちづくりアートとして設定している。また、先行研究から防災とまちづくりとアートの相互の関係を整理し、本研究は防災まちづくりアートの普及だけでなく、防災まちづくりの持続性とアートの特質に関して議論を深める上で意義があることを示している。

第2章「防災まちづくりアートの概念と手法の分析」では、防災とまちづくりとアートに関する先行研究と先行事例の分析を通して、継続的に進めている防災まちづくりは、防災課題を視覚化し、防災活動に楽しみを加味していること、まちづくりに導入して地域課題の効果が認められているコミュニティアートは作品制作のプロセスを重視していること、災害の記憶を防災につなげるアートが震災後に胎動していること等を明らかにし、防災まちづくりアートの概念を規定し、それを具体化する6つの手法を挙げている。併せて、地域課題の解決のために導入したプロジェクト性がアートの表現に制限を加えている課題についても論じている。

第3章「防災まちづくりアート・プログラムの開発とその評価」では、津波からの避難行動の体験と地域の災害文化の継承を主たる目的として自ら開発した防災まちづくりアート・プログラムを陸前高田市と下田市で実践し、プログラムを構築する設計プロセスと地域特性を踏まえたアート表現の方法、両地域の課題を踏まえたプログラムの違い等を論述した上で、参加者のアンケート結果を統計分析し、開発したプログラムが防災意識を高め、特に防災への関心が低い人へのアプローチとして有効であること、さらには他の防災学習や地域の将来の話し合いへの参加意欲も高める効果が認められることを明らかにしている。

第4章「防災まちづくりアートによるリスクコミュニケーション」では、前章の成果と課題を踏まえ、リスクコミュニケーションを促進するクロスロードゲームの要素を組み込み、太地町において試行した新たなプログラムを下田市の小学校において児童とその保護者向けに開発したアート・プログラムの経緯と内容を論述した上で、改良したプログラムが児童のリスクコミュニケーションの促進と自己有用感の向上につながる効果が認められ

ること、逃げ地図づくりワークショップや他の防災学習と適切に組み合わせることで相乗効果が期待できることを明らかにしている。

第5章「防災まちづくりアートのアート性と持続的展開に関する考察」では、国内外で広く普及している「イザ！カエルキャラバン！」の中で最も評価が高く、独自のプログラムを作成して持続発展的に展開している墨田区向島地域の事例を考察し、同プログラムの持続性と芸術性の相対する関係について議論している。また、複数のアーティストが住民として防災まちづくりに関わっている同地域では、防災課題に新たな視点を提示する点においてアートの芸術性を発揮し、建築・まちづくりの専門家との協働体制が防災まちづくりアートの持続性を可能にしていることを論じている。

第6章「結論と課題」では、各章で得られた知見を要約し、本研究を通して開発した防災まちづくりアート「キツネを探せ！」のプログラムの要点とその効果をまとめ、評価・改善を繰り返しながら検証した防災まちづくりアートの概念と手法を整理して記述している。また、防災まちづくりアートは補完的なプログラムであり、それだけでは十分な効果が発揮できないこと、防災まちづくりとアートプロジェクトを重層的に展開する中で、防災まちづくりアートの持続性と芸術性を両立していく方向性を示し、今後の課題としている。

5 論文の特質

第一に、本論文は、防災まちづくりアートという新しいアートの概念と手法を提示して自ら「キツネを探せ！」という新たなプログラムを開発・実践し、そのプログラムを汎用できるように客観的に論述している点に最大の特質がある。本論文で取り上げた「イザ！カエルキャラバン！」をはじめ、防災まちづくりアートに類する先行事例はあるが、それらに関する学術研究は見られず、その蓄積が極めて乏しい状況にある中、本論文は、防災まちづくりアートの方法的枠組を提示し、東日本大震災の被災地と南海トラフ巨大地震の未災地において実践して成果を得た具体的なプログラムの設計手法を明らかにしている。

第二に、その実践したプログラムの参加者の評価を統計分析して効果を測定し、アートの要素を防災プログラムに導入した有効性を検証すると同時に、防災教育上の課題を見出してプログラムを改善し、リスクコミュニケーションの促進効果を明らかにした点も重要である。従来のアートプロジェクトの研究では、経済波及効果や地域メディア、教育等に与える効果が多数報告されているが、防災については実践例が少ないこともあり、その効果が十分に検証されていない。加えて、その評価をもとにしてアート・プログラムに改善を加えた研究は見られない。本論文では、アートがもたらす感覚的変動が避難に関する自助・共助の意識を向上させる有効性を実証するとともに、リスクコミュニケーションの促進効果を高めるためにプログラムに改善を加えてそれを検証している。

第三に、以上の防災まちづくりアート・プログラムの方法的枠組を、海外にも展開されている有名な防災プログラムや長年にわたって防災まちづくりを継続している地域のアート活動にあてはめ、防災まちづくりアートの持続性と芸術性をめぐる論点を提示している点も、本論文の特質すべき成果である。

6 論文の評価

本論文は、アーティストとして自ら開発した防災まちづくりアート・プログラムの方法的枠組について論じ、防災まちづくりにアートの要素を組み込んだ効果を実証した実践的

研究であり，とりわけその防災まちづくりアート的方法的枠組と具体的なプログラムの提示に，防災まちづくりの持続性に関する実践的研究を発展させるうえでの学術的な意義が認められるとともに，その実践によるアート・プログラムの教育効果の実証は，コミュニティアートないしはアートプロジェクトの効果測定に関する研究に多大な貢献をなすものであり，学術的に高く評価できる。また，以上の効果測定は，調査データの適切かつ厳密な統計分析に裏打ちされており，この面でも十分に学術的な水準を満たしている。

7 論文の判定

本学位請求論文は，理工学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり，本学学位規程の手続きに従い，審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので，博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上